

2011年4月17日 西福岡教会説教

中川憲次

「十字架を担う」

聖書箇所: マタイによる福音書 10章 34節—39節

「10:34「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思ってはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。10:35 わたしは敵対させるために来たからである。人をその父に、娘を母に、嫁をしゅうとめに。10:36 こうして、自分の家族の者が敵となる。10:37 わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。10:38 また、自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない。10:39 自分の命を得ようとする者は、それを失い、わたしのために命を失う者は、かえってそれを得るのである。」

西南学院が新制大学になるとき尽力した人物に伊藤祐之という人がいます。この人は軍人の家に生まれ、京都大学で河上肇に学び、賀川豊彦や西田天香の影響を受け、また無教会派の信仰にも触れた人です。

さて、日本基督教団東郷教会牧師の大藪善次郎先生が『新制度 西南学院中学校三十年の歩み』という書物に寄せられた文章で次のように書いておられます。「我々が西南中学に入学したとき、入学式で伊藤祐之校長が『西南に入学したものは、大馬鹿者になれ。』』と言われたのにはおどろいた。そのおどろきが大きかっただけに、今でもその言葉が耳をはなれない。そして、大馬鹿者になることと、キリストに忠実になることとは、その当時、僕の頭の中では、なかなか一致しなかった。今でもそうなのだが……」。

伊藤祐之先生は第二次世界大戦敗戦の傷跡が残る1948年(昭和23年)から1951年(昭和26年)まで西南学院中学の校長を務められたのです。12歳前後の中学1年生に向かって、入学式で、「西南に入学したものは、大馬鹿者になれ」と言っていた伊藤先生は、ユニークです。しかし、その言葉の深い意味を少年であった大藪善次郎先生は正しく聴き取っておられます。大藪先生の文章によって明かされた師弟のドラマティックな出会いは、イエス・キリストという存在の言葉に尽くせない偉大さを教えてくれているように重います。

ところで、「西南に入学したものは、大馬鹿者になれ」と仰った時、伊藤校長の脳裏には、たとえば使徒パウロの次のような言葉があったのではないのでしょうか。「わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまづかせるもの、異邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです(コリントの信徒への手紙一 1章 23節—25節)」。イエス・キリストは人類の罪を背負うて十字架上で死なれました。人のために死ぬほど愚かなことはありません。伊藤先生は、このイエス・キリス

トに倣って、人のために「十字架の上で死ぬ如く」仕えるという賢い愚かさに生きようと新入生に語りかけられたのではないでしょうか。

本日お読みいただいたマタイによる福音書 10 章 34 節—39 節においてイエス・キリストは、「平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ」と仰り、また「自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない」と仰っています。ここで「自分の十字架を担う」とは、伊藤祐之先生流に言うなら、イエス・キリストを信じることによって「大馬鹿者になる」ことでしょう。

ところで、伊藤祐之先生はイエス・キリストに従うことが、家庭生活を初めとする幸せに剣を投げ込まれるということを実際に経験された方でした。先生は、1937 年、あの矢内原忠雄が東京大学教授を辞職せざるを得なくなった「神の国」という講演を語った日に、その講演会の司会をしており、その司会者としての祈りの中で当時の日本の歩みを批判したのです。そのため先生もまた特高警察に追い回されることとなりました。伊藤先生は当時無教会の独立伝道者として個人雑誌「新シオン」を発行しておられました。1896 年生まれですから 1937 年当時、先生は 41 歳だったこととなります。先生は当日の祈りの全文をご丁寧にもその個人雑誌に載せたのです。そのためこの雑誌は発刊処分となり、先生は迫害を受けることとなりました。1938 年 4 月発行の『新シオン』第 52 号の短歌欄「新しき歌」のご自分の一首に詞書して伊藤先生曰く、

「一九三七年秋試練の嵐、全国無教会陣営を吹きまくりぬ。此の秋聖名の為傷つきし戦士多し。(略)」

当局による迫害下、多くの無教会の信徒達が検挙されつつあったことが窺えます。更に、同号巻末の「身辺雑感」と題した文章で伊藤先生曰く、

「(略)尚ほ序でながら、本誌は昨秋来二度筆禍事件に遭遇せしが、二人の新婚の姉妹より其の主人の職業の故を以って本誌の読者たることの中止を申し出られた。もっと多からむ事を私は豫期して居しものであったが。誠意よりせざる読者の減ぜん事は私の切に冀ふ處である。今後とても遠慮なくドシドシ購読中止せられん事を。(略)」

『新シオン』第 48 号に件の祈祷が載せられたことによって、1937 年秋以来、無教会陣営に対する当局による迫害が起こったために、日和見主義的に『新シオン』の読者をやめる者が少なからず存在したことが窺えます。「今後とても遠慮なくドシドシ購読中止せられん事を」と言い放った伊藤先生の反応は堂々としたものだったと言えるでしょう。

続く 1938 年 5 月発行の『新シオン』第 53 号巻頭で「確くして揺(うご)くことなく」と題して伊藤先生曰く、

「昨秋来、我が無教会陣営に臨みつつある試練は恐らく内村鑑三先生の『非国民』以来のものであって、戦士達の負わされし軛は決して軽きものではない。勿論初代

基督教徒や宗教改革者達の負ひし十字架には遥かに及ばないかも知れないが、併し或者は既に血を灑ぎ或者はその地位と名誉と財産とを喪ひ或者は六十餘日間獄に繋がれた。(略)東京帝国大学教授の肩書をすてて見放(みさ)くる天は廣しも(略)基督(しゅ)の為に繋がれにける聖使徒を切にこそ思へ寝ねがてぬ夜を 而して今や聖名を呼ばふ者の間からさへ此等の者のうちの或者の上に非難・嘲笑・悪罵と等々までがそそがれつつある。」

そしてまた、同号の短歌欄「新しき歌」に「一九三七年十二月及び一九三八年五月本誌四十八号の故に宰の前に立つ」と詞書して伊藤先生詠んで曰く、

「さよふけて調べりぬ 疲れはてぬ 愛故と思(も)へば あつきもの目にあり」

また詠んで曰く、

「新宿にて乗込む乗客(ひと)等羨(とも)しかり 夜半を釈放(ゆる)され帰宅(かへ)り 往く身に」

また詠んで曰く、

「大いなる戦闘はてて夜半を帰宅(かへ)る吾を待つ家の電燈(あかり)あかかりし」

以上の三首には、取調べに疲労困憊している伊藤の息遣いが切々としていて迫りくるものがあります。伊藤の身に『新シオン』第四十八号の筆禍は生易しいものでなかったことが理解できよう。

そして終に、1938年6月発行の『新シオン』第54号の巻末で「西荻窪通信」と題して伊藤先生曰く、

「本誌四十八号にかかはる筆禍事件は六月二十二日不起訴と決定、茲に一段落をつけました。(略)尚ほ殆ど時を同じうして同じ筆禍にあられし海軍少佐水野廣徳氏(『此一戦』の著者)は罰金刑に處せられました。」

伊藤先生の安堵が伝わってくる文章です。更に同号の短歌欄に伊藤先生一首を詠んで曰く、

「ただひとりとなるをおそれで戦わむ 御霊のわれをひきますまに」

ここに、本日お読みしたマタイによる福音書10章38節の意味で「十字架を担って」いる人がいます。